

# 「～のだ／～んです」の用法とその意味

—— 日本語学習者の誤用から ——

江 後 千香子

【キーワード】～のだ／～んです／前提／日本語教育／誤用

## 要旨

「～んです」の文型は、その使用にあたって何らかの「前提」が必要とされる。「前提」には言語化されているものと言語外のものがあるが、特に言語外のものが多く見られる。日本語学習者に「～んです」の誤用が多く見られるのは、この言語外の「前提」のわかりにくさにあると思われる。

また、「～んです」のさまざまな機能が生まれてくるのもこの「前提」からである。具体的には、未知の情報の開示、強い自己主張、反論を許さない強い断定などがある。「～んです」の用法を誤ると、これらの機能が裏目に出て人間関係に悪影響を与える場合がある。この文型の学習にあたってはこのような機能面についても十分注意する必要がある。

## 1. はじめに

日本語の学習は、さまざまな文型の意味を理解し、使い方を身につけていく作業の積み重ねである。しかし、日本語学習者にとって、その意味を理解することはできても、実際の場面で使うことが困難な文型がある。例を挙げると、たとえば、“コソアド”の指示語や受身文などがあるが、「～のだ／～んです」の文もその一つである。この文型は、早い段階で学習するものであるにもかかわらず、学習者にはなかなか使いこなせないものである。また、使ってはいても不適切な使い方であることが非常に多い。その上、この誤用は対人関係に悪影響を与えることも多く、その使い方について十分な訓練が必要であろう。

ここでは、学習者の誤用を分析し、そこから「～んです」の意味と用法について考えてみる。

## 2. 1. 日本語教育における「～んです」の扱い

日本語教育の初級で「～んです」の文型を導入する場合、その意味は大別すると次のように説明されている。

①相手の何かに対して関心を抱き、説明を求める場合。

(1) : (相手の持ち物を見て) どこで買ったんですか？

——新宿で買いました。

②理由などを質問する場合、またその質問に対して答える場合。

(2) : どうしたんですか？

——頭が痛いんです。

③自分の発言に対して理由を補足する場合。

(3) : 昨日は学校を休みました。熱があっったんです。

教師側の理解としてはこのように説明されるが、もちろん学習者は初級段階であるからこのような説明はできず、この段階では、例文から文型の使用意図をくみとらせなければならないのである。

①と②はどちらも疑問文であるが、疑問詞の違いもあり、さらに答の文型が異なっている。①の場合、答の文で単に事実を述べる場合は「～んです」を用いないが、②の場合は必ず「～んです」を用いて答える。

この3つの中で、③は比較的理解しやすく、また誤用も少ない。理由の説明だと理解し、その範囲で使用していれば問題はない。最も問題になるのは、①の「何かに対して説明を求める」という部分である。誤用が多く見られるのもこの①である。まず、この①の誤用について例を挙げて見てみよう。

## 2. 「～んですか」の誤用

日本語教育においては、初級の中ごろの段階で「～んです」の文型が導入される。日本人の会話の中で頻繁に使われる文型であるため、学習者は自分でも積極的に使おうとする

のだが、文法的に不適切であるばかりでなく、相手の気分を害してしまうことがよくある。  
例えば、次の会話例を見てみよう。

(4) 〈学校の事務所で〉

学生：私の荷物、まだ来ないんですか。

職員：（なぜ私が責められるのだろう？）え、ええ…。

この例文には理由を問う疑問詞が含まれていないため、文型から判断すると①の「関心を抱き、説明を求める」用法ではないかと予想される。この例文は、文法的に非文であるという意味での誤用ではない。文法的に不適切な箇所はないのだが、ここでは、「～んです」が使われることによって、相手を詰問するような言外の意味が発生している。多くの場合、これは学習者の意図したことではない。しかし、この誤用は聞き手に言われのない不快感を感じさせ、結果として相手との人間関係に悪影響を及ぼしてしまうことにもなりかねないものである。

これを「～んです」を削除して次のような会話にするとどうだろうか。

(4') 〈学校の事務所で〉

学生：私の荷物、まだ来ませんか。

職員：ええ、まだですよ。

「～んです」を削除するだけで、普通の会話として通用するものになる。<sup>1)</sup> このように、文の隠れた意味に大きな影響を与える「～んです」の誤用は、どのようにして発生するのであろうか。また、このニュアンスはどこから来るのであろうか。

### 3. 「～んです」の意味と機能

日本語学習者が日本語を学ぶ時に、まず文型の意味を理解することから始めるのは当然である。しかし、実際の使用場面において、学習した意味に基づいて自分の意図したことを表現しようとして使った文型が、結果的に不適切なものになってしまうことが多々あるのである。それは、各文型が談話の中で果たす機能についての理解が不十分であることが大きな理由になっている。

「～んです」は、文の構造の中では「～はずだ」「～わけだ」などと同様に、説明、推論のモダリティを表す文型である。説明を表す他の文型と「～んです」を区別しているのは、「前提」、特に「言語外の前提」とでも言うべきものの存在である。

久野（1973）、田中（1983）などに述べられているように、「～んです」の文には何らかの「前提」が必要である。この「前提」とは、話し手や聞き手が前に言ったこと、したこと、また、話し手や聞き手の状態などである。先に挙げた三つの中で「前提」が一番はっきり表れているのは③で、この場合、「前提」は先行する自分の発言であり、明確に言語化されている。それでは、①と②の場合、その「前提」はどのようなものなのだろうか。これらには、③のようなはっきりと言語化された「前提」は見当たらない。しかし、それぞれの発話の状況を考えてみれば、「言語外の前提」はおのずと明らかになる。

①の場合、このような発話がされるためには、話し手が聞き手の持ち物に興味、関心を持っている、その持ち物について何らかの情報を得たがっている、といった状況が必要であろう。そのような状況なしに①の発話がなされることはありえない。

同様に②の場合も、聞き手が気分が悪そうにしている、顔色が悪い、などの状況が発話の前提条件として必要である。これらの前提条件が満たされない時に「～んです」の文型が使われた場合、それは不適切な使い方となり、非常な違和感をもたらす。

たとえば、例文（4）の場合、

（4）まだ来ないんですか？

と言われた側は、「～んです」の文型に対する反応として何らかの前提条件を探そうとする。「～んです」は相手に説明を求めるものであるから、聞かれた側は相手に説明しなければならない。しかし、この場合、聞かれている人物は荷物が来ていないことに関して説明の義務を負った当事者ではない。もしかするとその事情について何も知らないのかもしれない。このように、当事者ではなく何の責任もない第三者に対して「～んです」を使うと、自分のせいではないことについて責められているような感じを受けるのである。

このように、「～んです」を使用するためには、まずその場面の状況を適切に捉え、「前提」を把握することが必要なのである。この「前提」について、さらに違った形での誤用を例にとって検討してみよう。

#### 4. 「～んですから」の誤用

「～んです」の誤用の中で、「～んですから」の形の誤用も、しばしば見られるものの一つである。この誤用も対人関係にマイナスをもたらすことがある。

(5) 頭が痛いんですから、早く帰ってもいいですか。

この誤用は多くの場合、単なる理由の説明のために「～んです」と「から」の両方を使ってしまうのが原因であり、このようなものは「～んです」を削除することによっておおむね正しい文になる。<sup>2)</sup>

(5') 頭が痛いですから、早く帰ってもいいですか。

この場合、「～んです」を使うことによって、自己主張が強すぎるような、何か押し付けがましいようなニュアンスが発生している。あたかも、話し手の頭痛のことが周知のことであるかのような主張、聞き手は話し手の頭痛を知っていて当然だ、と言わんばかりの態度を感じさせる。このような自己主張の強さは「～んです」の大きな特徴である。(5)は文法的な誤用とは言えないが、「～んです」の機能を理解していないための機能的な誤用だと言えるだろう。

しかし、「～んですから」の形が全て誤用というわけではない。中には正しい文もあるのだが、その場合の「～んです」はどのような意味を持っているのであろうか。例文を挙げてみよう。

(6) もう大人んだからそんなことはやめなさい。

(7) 時間がないんだから早くしてちょうだい。

(8) 私がこの目で見たんだから確かです。

(9) 決まったことなんだからしかたがない。<sup>3)</sup>

(6) の場合、聞き手は必ずしも「自分は大人だ」と自覚しているとは限らない。少なくとも話し手は、聞き手に対して、一段上の立場から教諭するように自分の意見を述べている。(7) (8) (9) の場合にも同じように、「時間がない」「私が見た」「決まっ

たことである」という事実を、聞き手が知らないものとして発話しているとも考えられるが、この三つの場合、これらの事実を知っている聞き手に対して、話し手がその事実をより強く主張するために使用しているとも解釈できる。

たとえば、(7)の発話は、一緒に出かける支度をしている母から子供に対して発せられたものだとするれば「時間がない」という事実は自明の「前提」であるが、買い物の際に店の人に対して発せられたものだとするれば、店の人にとっては、この事実は自明の「前提」ではない。このような場合の「～んです」は、話し手本人にとっては既知である一つの事実を、聞き手に対して認めさせる、あるいは受け入れさせるといった機能を担っているのである。

(6)～(9)の例文に共通しているのは、話し手の強い自己主張、あるいは、聞き手の反論を許さないような強引さである。この強引さが生まれる原因は、「～んです」が要求する「前提」であると思われる。「前提」は本来話し手と聞き手に共有されているはずのものであるが、(6)～(9)の場合、この「前提」が両者に共有されていない。このように、話し手と聞き手の間に共通する「前提」なしに使われた「～んです」は、話し手の心中にある「前提」を一方的に聞き手に押しつけることになり、相手の気分を損ねることにもつながるのである。

## 5. 「～んです」の誤用

このように「～んです」は、扱いによって人間関係に悪影響を及ぼすため、日本語教育においては、「～んです」の文型はもっぱら疑問文（すなわち、何らかの「前提」に対する質問）、または疑問文に対する答えの文（質問されていることが「前提」）として使用するよう指導されている。逆に言えば、何もない状況では使うなということでもある。しかし、実際には「～んです」が会話の冒頭から平叙文の中で使用されることもないわけではない。

(10) あもう、実は、今度結婚するんです。

のような例文において、「～んです」は、聞き手がその情報を知らないと言う「前提」のもとで、聞き手にとって未知である情報の開示をするという機能を担っている。そこには同時に、聞き手にその情報を知ってほしいという話し手の強い意志が感じられる。

それでは、次のような例文ではどうだろうか。

(11) 今日パーティーがあるんです。

———そうですか。

という例文は、聞き手が「今日パーティーがある」という情報を知らないだろうと推定して、その前提の下での発話であると考えられる。実際に聞き手がその情報を知らない場合には問題ないが、実際には聞き手がその情報を知っていた場合、聞き手に自分が馬鹿にされたような印象を与える。実際に情報の上で優位に立っているわけではない時に聞き手に情報を提供することになり、非常に失礼な態度になってしまう。

(12) 今日のパーティーに行きますか。

(a) ?ええ、行くんです。

(a' ) ええ、行きます。

(b) いいえ、行かないんです。

(b' ) いいえ、行きません。

(13) 今日のパーティーに行かないんですか。

(a) ええ、行かないんです。

(a' ) ええ、行きません。

(b) ?いいえ、行くんです。

(b' ) いいえ、行きます。

(12-a) は、何の前提も想定していない質問に対して答が周知の事実であるかのような印象を与えるので不適切。(12-b) は未知の情報の開示となり適切。(13-b) はややわかりにくい、(13) の質問が発せられた時点で「聞き手がパーティーにいかない」ことを予測させる何らかの事実が「前提」として両者に共有されているものとすれば、その「前提」に反する否定の答えは不適切になるのであろう。

この「情報の開示」の機能を逆手にとったのが、

(14) ちょっとお聞きしたいんですが、…

のような他人の注意を引くという用法であろう。(10) などにもよく表れているが、「～んです」には、話し手から聞き手への「聞いてほしい!」という強い働きかけが感じられる。

しかし、その強い働きかけは逆方向に働くこともある。

(15) 行くといったら、行くんだ。

(16) ぜひ見たいんです。

のような例文では、相手の反論を許さない強い断定を表している。この時は、聞き手に対して「何も言うな!」と言外に言っているのである。

反論を許さない断定、ということになると、かつての人気アニメ『タイガーマスク』の中の有名なセリフが思い出される。“虎の穴”の首領であるミスターXが、主人公である伊達直人に対して

「虎だ。お前は虎になるのだ!」

嫌だと言っても逃げることはできない、まさに問答無用の状況である。「～んです」にはこのような強い働きかけの機能もあるのである。

## 6. 「～んです」の性格

ここまで「～んです」の意味と機能を考えてきたが、特に目につくのが、対人的な機能である。「～んです」は対人的に強く働きかける機能を持つ反面、誤用は対人関係にかなりの悪影響を与えてしまう。

まず、「～んです」には「前提」という必要条件があるため、その「前提」が共有されていない場合、ひとりよがりの「前提」の押しつけになってしまい、極めて失礼な態度になる。また、「～んです」には未知の情報を開示する機能があるため、話し手を情報的に上位に位置づけることになる。さらには、話し手の感情・強い気持ちが込められており、自己主張の強さを嫌う日本文化の中においてはその使用に十分な注意を要するものである。



## 7. まとめ

「～んです」という文型には何らかの「前提」となる状況が想定される。この「前提」は、基本的には、話し手と聞き手との間で共有されているべきものである。しかし、この性質を逆に利用して、「前提」が話し手と聞き手との間に共有されていない状況で「～んです」を使い、未知の情報を紹介したり、自分の主張を強く働きかける、という別の用法もある。このことを十分に意識していないと、話し手の意図とは異なったことが聞き手に伝えられてしまう場合がある。日本語学習者に「～んです」の文型を教える場合、このようなことに十分留意する必要があるだろう。

-----  
(注1) ★私の荷物、まだ来ていませんか。  
が最も適切な文である。

(注2) 本来は、  
★頭が痛いので、早く帰ってもいいですか。  
が最も適切な文であるが、これは「から」と「ので」の問題であって、「～んです」とは直接関係しないのでここでは触れない。

(注3) 「～んですから」よりも「～んだから」の形の方がより適切であるのは、「～です」が従属節中にあるためであると思われる。

### [参考文献]

- 田中望 1983 「日本語教育と談話の研究」  
(国立国語研究所 日本語教育指導参考書11『談話の教育と研究5』)  
田野村忠温 1993 「『のだ』の機能」(明治書院『日本語学』第12巻第11号)  
寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味・6』(くろしお出版)  
姫野昌子 1993 「日本語教育における「の」の指導」  
(明治書院『日本語学』第12巻第11号)  
森田良行・松木正恵 1989 『日本語表現文型』(アルク)

(えご ちかこ/日本文化言語学院非常勤講師)